

CONTENTS

■ 海雲プール	1
■ 学祖・長谷川良信と社会事業の先覚者たち Ⅷ	2
■ 平成30年度淑徳大学アーカイブズ特別展 「夢の力—歴史・仏教から福祉へ—」を観て	5
■ 淑徳大学アーカイブズ日誌（2018年11月～2019年5月）	6
■ 「淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会」のご案内	8



— 海雲プール —

1965年（昭和40）の開学当時、淑徳大学には「海雲プール」と名付けられた25mの屋外プールがあった（現・大巖寺幼稚園敷地内）。夏休み中の8月にプール開きが行われたため学生は不在だったが、千葉市水泳連盟の協力によって模範水泳などが行われた。

プールの名は、学祖・長谷川良信が学生のあるべき姿とした善財童子が出会った53人のうちの一人で、浜辺に12年間座ったままひたすら海を見つめ続けて悟りを得た人物「海雲比丘」からとったものである。

プールは地域の子どもたちにも開放され喜ばれたが、井戸水を利用していたため水温が低いのが難点であった。1970年代以降利用されなくなり、安全管理のために撤去された。（淑徳大学アーカイブズ所蔵）

学祖・長谷川良信と社会事業の先覚者たち Ⅸ

— 椎尾弁匡 —

淑徳大学アーカイブズ 所長

長谷川 匡俊

長谷川の所属する浄土宗門にあって、先に取り上げてきた渡辺海旭・矢吹慶輝と並ぶもう一人の恩師ともいべき存在に椎尾弁匡（1876～1971）をあげないわけにはいかない。椎尾は明治・大正・昭和の三代にわたり浄土宗を代表する仏教学者として知られ、かつ仏教の社会化に尽瘁し、「共生」運動を展開したことで有名である。とくに、彼の提唱した仏教に基づく「共生」の思想は、先行き不透明な21世紀のキーワードとして、改めて注目を浴びている。

はじめに椎尾の生涯の概略をたどりながら、長谷川との接点を見届けておきたい。椎尾は1876（明治9）年7月6日、愛知県春日井庄内村の真宗高田派円福寺椎尾順位・木村ジャウの五男として生まれた。88年浄土宗の瑞宝寺原弁識について得度し、浄土宗高等学院・京華中学・第一高等学校を経て、1905（明治38）年7月、東京帝国大学哲学科宗教学を卒業し、同9月、宗教大学教授となった。07年浄土宗教学部長、早稲田大学講師となり、13年東海中学校長に就任。09年「釈尊よりシャンカラ、アーチャリアにいたるインド哲学」で文学博士の学位を受けた。

ちなみに、長谷川が宗教大学に入学したのは1910（明治43）年で、卒業は15（大正4）年であるから、在学中に面識を得ていることと思われる。

椎尾は26（大正15）年、大正大学（旧宗教大学改組）教授となり、28（昭和3）年文学部長、36年には第6代学長（～38年）に就任した。一方、長谷川は18年に宗教大学社会事業研究室理事として大学と関わり、21年には同大学講師、海外留学後の24年に教授に就任しているから、同じ大学で教鞭をとっていたことになる。とはいえ、すでに仏教界における時の人でもあった椎尾を、長谷川は、身近な恩師・渡辺海旭とは別の意味で尊敬の眼差しを向けていたにちがいない。椎尾は太平洋戦争中の42～44年（第9代）、そして戦後の52～57年（第14代）と、三度学長に就任している。同大学史上異例のことである。この三度目の学長時代に、長谷川との間に緊密な関係があったことは後



椎尾弁匡師

（淑徳大学アーカイブズ所蔵）

述したい。

また浄土宗の僧侶としては、13年東京二本榎清林寺の住職、40年名古屋建中寺に転住し、44年大本山京都清浄華院法主、翌年に増上寺に転じて大僧正に昇叙された。政治家としても28（昭和3）年以来、36年、38年と衆議院議員に三選したほどである。先述の「共生」運動に関して言えば、22（大正11）年鎌倉で第1回共生結集を開き、それより結集を重ね、35年財団法人共生会を結成し会長に就任した。なお、椎尾は60代で眼疾を患い、80歳以後は失明状態にありながらも、「昭和の鑑真」と称されるほど、仏教界のみならず広く世に影響を与え続けて、71（昭和46）年4月7日遷化。世寿95歳。

* * *

椎尾と長谷川との関係を考える場合に重要なことは、両者共に宗教と社会との緊密な関係を提起しており、その立場から仏教、そして浄土教（法然浄土教）の再解釈を行っている点であろう。たとえば椎尾は、18（大正7）年「浄土教と社会」と題する論文を宗教大学の機関誌『宗教界』に発表して、浄土教がいかに社会的性格をもつ教えであるか訴えている。そして、浄土教には厭世教、未来教、他力教、随信教、称名教

としての性格がそなわっていると、それらと社会との関連を論じたうえで、最後に全体の総括をして、浄土教は「社会的浄土の建設」を旨とするものと結論づけている。

このなかで、とくに注目されるのは、浄土教の「厭世教」としての立場に、独自の解釈を施している点だ。「厭世教」と言われれば、とかく非社会的、非現実的な教えとして、従来しばしば批判の対象となり、ネガティブな評価が下されてきたのだが、椎尾はむしろ、「厭世教」であることがかえって逆に現実の世界（世俗の価値）を相対化しうるから、社会的な意義を持つのだというわけである。この点は以前に紹介した渡辺海旭（本誌第16号・第17号）が、浄土教の「厭穢欣浄」思想のなかに「破壊と建設」の原動力を見出したのと相通じるものがあるが、椎尾はさらに個我の否定のうえに立つ社会の一員としての自己を加えている（それは、時代状況を前提にすると、「滅私奉公」への危うさと背中合わせでもある）。いずれにしても、海旭や弁匡の浄土教理解に基づくこうした主張のなかに、かつて思想史家・家永三郎が指摘したような日本仏教の「否定の論理」が脈打っていることは興味深い事実と言えらる。

また椎尾は、26（大正15）年刊『社会の宗教』のなかで、

是の社会共存の人生にあって、人間生活の内に大きな光と力とを投げかけるものが宗教である。故に宗教は必ず社会的なもので無くってはならぬ。個人解脱と考へたのは社会発達の一階梯であって究境相ではない。究境は只社会的な事象であって、社会的に解脱し、真の共生を完うすべきのみである。

と主張しているが、まさに「共生運動」の契機をここに見出すことができよう。

それでは、長谷川の場合は対社会との関係において浄土教をどのように捉えていたのだろうか。ここでは、34（昭和9）年の論文「浄土宗社会事業概観」（浄土宗社会課発行『浄土宗社会事業年報』所収）の前段に展開される所論の一節を取り上げてみよう。

由来、浄土教徒の理想は願生がんしょうの一事にある。而も此の願生には自から個人的願生と社会的願生との二義を内包するのであって、個人的願生は生の更新永続であり、目前の死滅的迷蒙生活を転じて生成脱落の真生を致すの故であり、これが方法としては念々自身に仏名を誦持するを以て能事とするのである。然るに社会的願生は単なる自己一身の

慰楽更生ではない。一切の同胞有縁を駆って、大悲の願船に搭じ、同生楽邦の素懐を遂げしめるにあるのである。思うに浄土念仏の教義が、大乘至極の妙教として曠古の福音たる所以は実に此の個人と共に社会そのものの救いを徹底する所にありと信ぜられるのである。

長谷川は、浄土教の理想である「願生」（願往生）に個人的願生と社会的願生の二義が内包されているとし、「個人と共に社会そのものの救いを徹底する所」に浄土念仏門の本領があるとした。この点には先の椎尾の説く「個人的解脱」と「社会的解脱」の二義を想起させるものがある。そして、「ここに本願所成の根本精神たる仏陀の正道大慈悲を回顧し、これを敷衍し拡充して社会浄化の諸事業を越し、以て正義と仁愛との处世規範を現実社会の一々に適用し、以て願生剋果の必須条件たらしめようとするもの、これ即ち宗門社会事業の要諦なりと信ずるのである」とあるように、本願＝仏の大慈悲に依拠する「社会浄化の諸事業」の現実社会への適用を「願生剋果」すなわち「社会的願生」成就の必須条件に格付けしようというものであった。この点は、社会事業が願生のための単なる「助縁」であった時代はすでに去り、宗義上からも願生成就のために欠くべからざる条件として、「念仏正行と不可分の行持され策励さるべきこと」と位置づけられているところからも注目される。

この同じ『年報』に椎尾は巻頭を飾って「浄土宗義と社会事業」と題する論文を発表している。「宗義のきまらぬ宗門の社会事業は雑然たるもの、雑行雑修の社会事業である。（中略）宗門の社会事業は宗門意識の現われでなければならぬ」というが、彼によれば、社会事業の問題（対象）も解決の方向も実践もすべてその根拠を弥陀の四十八願に求めてこそ「浄土宗の社会事業」たりうると独自の論理が展開される。そして、「救済の中に真の如来の力を見出し、困苦のものを世話することの中に如来の慈光を見出すのである。かくてその事業を遂行する中に合掌歓喜の根本精神が指導力となって社会事業を一層発達せしめる」とし、社会事業と念仏信仰との相即的深化徹底が説かれているのは傾聴すべきで、長谷川の主張もまたこれと響き合うものがある。

* * *

つぎに、両者の関係を社会事業の実践面から考えてみるとどうなるだろうか。長谷川が、仏教者の止むにやまれぬ思いで東京西巢鴨の二百軒長屋に飛び込みセツルメント活動を始めたのは1918（大正7）年10月の

ことである。そして翌19年1月に、本年100周年を迎える「マハヤナ学園」が設立された。実はこの頃、第一次世界大戦末期のロシア革命の影響によってもたらされた社会改造、世界改造の機運が各国に波及すると、その「改造」の叫びは我が国の宗教界にも押し寄せ、宗教改造、寺院改造の火の手があがったのである。浄土宗内にあっても「寺院改造」についての動きは19年中ごろから勃発し、20年の初期に最高潮に達した観がある。

実はその寺院改造の先駆的役割を果たしたのが、他にもない椎尾の率いた「慈友会」である。名古屋市内（東区）浄土宗70の寺院と檀信徒からなる組織で、正式に発会式をあげたのは20年3月7日のことであった。「会則」第二条には「本会ハ仏教ノ信仰ニ基キ時代ニ適応セル社会事業ヲ行フヲ以テ目的トス」とあり、防貧・教化・救護・調査等にわたって多彩な社会事業を展開してゆく。その動向は長谷川にとっても目が離せないものであったに違いない。長谷川の前掲「浄土宗社会事業概観」には、当時の浄土宗社会事業界の実況が見事に伝えられているが、そのなかに次のような「慈友会」についての紹介がある。

防貧事業としては、或は総合的社会事業としての名古屋の慈友会は顕著なる一箇の存在である。蓋し椎尾勸学の根本指導の下に、教区公選寺院としての建中寺の教化活動を合理化すべく努力された飯尾、真野、堀場等諸法將の聡明周到なる態度は確かに宗門寺院の教化組織上に一の形態を与へたものであって、吾人の随喜敬重措かざる所である。（中略）言ふ所一に経営難にあるが如き社会事業界の現状にあって、経営の透徹明朗慈友会の如きは以て一箇の規範となすに堪ふべきものであらう。（下略）

このような「慈友会」に対する高い評価は、同会が椎尾の強力な指導に基づいて運営されているからであろうし、「寺院社会事業」の唱導者たる長谷川の理想に適うところがあったというべきかもしれない。

* * *

では、第二次世界大戦後における両者の関係はどうであったらうか。さしあたり資料で確認できる二つのことがらを紹介しておきたい。まず一つは、長谷川が第1次渡伯から帰国（55年3月）した年の9月26日付椎尾宛の私信（控）である（『全集』2巻、p601～603）。冒頭、「御電話をいただき恐縮且つ先生の社会福祉学関係につき、小生に対する関心と観念を垂れ給

うに対し知己の感に堪えず、聊か所見を記して酬答に代えます」と見えるところから、本文書は大正大学の学部増設等の将来計画について、当時学長職にあった椎尾が、長谷川に直接電話をかけ意見を求め、後日長谷川が自らの構想を長文の書面に認めたものである。椎尾の長谷川に対する信頼と期待がベースにあって、時代の趨勢を読むことにたけた長谷川らしい新学部構想は興味が尽きない。以下、要点のみ紹介しよう。

新学部は、既設の「社会学科」を拡大して「社会労働拓殖学部」とし、つぎの5学科を置く。1 社会学科（現行「社会学専攻」）、2 社会福祉学科（現行「社会事業専攻」）、3 社会教育学科、4 労務管理学科、5 移住拓殖学科であり、とくに新設計画の3・4・5は長谷川ならではの着想だ。なかでも5について、「今や移民問題が民族死活の重大問題となった今日に於て本学が率先、農工産業や教育文化に社会福祉に専門的教養ある開教使の養成に当るとしましたら、これ方に時運に先駆し、時代をリードするもので、宗教大学としての天籟の使命に任ずるものでありましよう」と記し、「何といても日本の移民政策に一番かけているのはこの移民指導者の養成です」と言い切っている。こうした長谷川の提言を椎尾がどのように受けとめたものかは判明しないが、二人の深い師弟関係を髣髴とさせる。

当時の長谷川は、学園経営や自坊大巖寺の復興に努める一方、ブラジル開教に心血を注いでいた。彼の第2次渡伯（57年3月～58年10月）の折の日記を読むと、滞在中数度にわたって椎尾へ手紙を書き送っており、返信もあったことがわかる。それが二つ目のことである。具体的な内容こそ不明だが、帰国の途に就く前の9月7日の「日記」には、「椎尾先生に長文最後の手紙かき、伯国仏教界状況を報告す」とみえる（『全集』4巻、p261）。長谷川はブラジル開教事業の最前線にあって、日本からの支援や協力を得るため、実にこまめに手紙を書き現地の情報を届けている。そうした中で、長谷川の良き理解者・支援者としての椎尾の存在が浮かび上がってくる。「随縁随想」に記された以下の一節もそれを物語るものであらう。

元日（1960年）午後には縁山互礼会に出、椎尾法主台下に謁して数時間にわたりかねて立案を囑せられていた「国際移住学院」や「七五三殖民会社」案について委曲答申書を提出構想一斑を申し上げて、本山としての奮発を要請した（『全集』3巻、p104～105）。

「夢の力—歴史・仏教から福祉へ—」を観て

日本大学企画広報部広報課

常勤嘱託 小松 修

平成30年度の淑徳大学アーカイブズ特別展は、「夢の力—歴史・仏教から福祉へ—」であった。日頃夢の「不思議さ」を感じていたことから、興味深く観覧させていただいた。

夢と言えば、現在では「未来への願望」の意味として使われることが多いが、前近代においては「寝ている時に見る夢」を意味し、その認識は各時代で違っていた。特別展は、夢について、その歴史と仏教とのつながり等から接近することで、未来の福祉の可能性を追求しようとしたものであった。構成は「第1章 夢はどこから—夢の時代性—」、「第2章 夢に導かれて—僧侶の夢—」、「第3章 夢を表現する—夢の世界へ—」の3章によってなされている。

第1章では、古代から近代までの人々の夢に対する認識を紹介している。全体の総論にあたり、展示資料も3章の中で一番多く、「1 夢を求めて」(中世末まで)、「2 夢の転回」(近世初期以降)に区分されている。この区分は、夢に対する認識が、中世末期から近世初期頃を境に大きく変化していることからであった。

古代・中世においては、夢は人間を超越した神仏など、外から送られてくるメッセージと考え、未来を予測する占いとして、現実の出来事と同じくらい重要な意味を持っていた。

初めは夢を見ることができるのは特権的な「王」のみと考えられていたが、やがて階級に限らず、誰もが夢を見て、神仏からのメッセージを受け取ることができるようになった。近世初期以降、神仏が聖なる存在

から世俗化してくると、それに伴って夢の重さは低下していった。近代になって西洋の夢認識が流入し、夢が外からやってくるという認識から、自分の心の表れであると考えられるようになった。このような認識は、夢の歴史から見ればごく最近のことであった。

第2・3章は、夢についての各論にあたり、第2章は夢告によって進むべき道を示唆された、鎌倉仏教の祖師たちの宗教体験を、浄土系の法然、一遍などを例に紹介している。第3章は、夢について記録した人物について、「1 夢を日記に残す」「2 夢と縁起絵」「3 夢百話」に分けて紹介している。

展示資料は、『古事記』『絵巻』『縁起』『随筆』『日記』『小説』など多様なもので、夢に関する記録が多く残されていることに驚いた。各資料については、「夢の物語」「歴史メモ」「夢事典」など丁寧な解説があり、「夢百話」(夢は夢主の数だけある)の配布資料も参考になった。

特別展では、夢が深く歴史に関わり、その認識が世界に共通する点があることなど、興味深い指摘なされている。欲を言えば、近代の資料と福祉との関連について、もう少し詳しく説明して欲しかった。

前述したように、私は夢を見ることがけっこう多く、「夢って不思議だなあ」とかねがね思っていたが、それ以上は考えることはなかった。今回の特別展によって、夢の豊かな歴史とその奥深さに触れることができ、さらに夢についての興味を高めることができた。



淑徳大学人文学部歴史学科1年生見学
(2019年5月10日)



淑徳大学看護栄養学部看護学科見学
(2019年6月17日)

淑徳大学アーカイブズ日誌（2018年11月～2019年5月）

11月 1日	銚子市圓福寺にて展示用の写真撮影。〈大寫〉
11月 1日	学園本部職員中村博彦氏資料閲覧のため来室。
11月 6日	中国高校教員対象学校見学会キャンパス・ツアー参加者学祖展・アーカイブズ特別展見学。
11月 8日	マハヤナ学園100周年記念誌執筆のため資料閲覧（於マハヤナ学園撫子園）。〈大寫〉
11月 8日	2018年度第3回自校教育推進委員会出席（テレビ会議）。〈桜井〉
11月 9日	第144回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者3名）。
11月 9日	マハヤナ学園100周年記念誌執筆のため資料閲覧（於マハヤナ学園撫子園）。〈桜井〉
11月12日	マハヤナ学園100周年記念誌執筆のため資料閲覧（於マハヤナ学園撫子園）。〈桜井〉
11月15日	福田会育児院史研究会資料解説作業（於福田会広尾フレンズ）。〈桜井〉
11月17日	地域社会福祉史研究会連絡協議会第18回総会・交流会出席（於淑徳大学東京キャンパス）。〈桜井・大寫〉
11月19日	千葉キャンパス アドミッションセンターより大学案内・オープンキャンパス関係資料寄贈。
11月19日	長谷川匡俊大乘淑徳学園理事長より大学及び社会福祉関係資料寄贈。
11月24日	2018年度アーカイブズ特別展臨時開室。
11月28日	マハヤナ学園職員13名学祖展・アーカイブズ特別展見学。
11月28日	認証評価室より認証評価関係書類移管。
11月29日	総合福祉学部白井伊津子教授・郷堀ヨゼフ准教授と来年度特別展の打ち合わせ。〈桜井・大寫〉
11月30日	マハヤナ学園創立100周年記念誌打ち合わせ（於マハヤナ学園撫子園）。〈桜井〉
12月 1日	2018年度アーカイブズ特別展臨時開室。
12月 3日	銚子市圓福寺へ特別展の借用資料返却。〈桜井〉
12月 6日	全国大学史資料協議会東日本部会第178回幹事会・第112回研究会出席（於フェリス女学院大学緑陰キャンパス）。〈桜井・大寫〉
12月13日	千葉県文書館へ特別展の借用資料返却。〈大寫〉
12月13日	福田会育児院史研究会資料解説作業（於福田会広尾フレンズ）。〈桜井〉
12月14日	第145回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者3名）。
12月14日	認証評価室より大学刊行物寄贈。
12月15日・16日	第109回歴史博フォーラム「死者と聖者の共同性―葬送墓制の再構築をめざして―」参加（於早稲田大学大隈記念講堂）。〈大寫〉
12月15日	2018年度アーカイブズ特別展臨時開室。
12月15日	2018年度第2回千葉・関東地域社会福祉史研究会運営委員会出席（於墨田区西光寺）。〈桜井〉
12月20日	『千葉・関東地域社会福祉史研究』第43号発行。
12月22日	マハヤナ学園創立100周年記念誌編集委員会出席（於大乘淑徳学園本部）。〈桜井・大寫〉
12月27日・28日	マハヤナ学園100周年記念誌執筆のため資料閲覧（於マハヤナ学園撫子園）。〈大寫〉
1月 7日	『淑徳大学アーカイブズ・ニュース』第18号発行。
1月11日	看護栄養学部牧野正直客員教授夫妻学祖展・アーカイブズ特別展見学。
1月11日	第146回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者3名）。
1月21日	学園本部職員田島豊氏と学園の文書管理について打ち合わせ。〈桜井・大寫〉
1月24日	福田会育児院史研究会ポーランド児童関係日誌解説作業（於福田会広尾フレンズ）。〈桜井〉
1月24日	全国大学史資料協議会東日本部会第179回幹事会・第113回研究会参加（於立教大学池袋キャンパス）。〈大寫〉
1月25日	第147回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者3名）。
1月25日	学生サークル・こぶしセツルメントより資料寄贈。
1月30日	2018年度第9回福田会育児院史研究会出席（於福田会広尾フレンズ）。〈桜井〉
2月 3日	2018年度アーカイブズ特別展臨時開室。
2月 5日	学園本部職員田島豊氏と学園の文書管理について打ち合わせ（於大乘淑徳学園本部）。〈桜井・大寫〉
2月 7日	福田会育児院史研究会ポーランド児童関係日誌解説作業（於福田会広尾フレンズ）。〈桜井〉
2月 7日	長谷川匡俊大乘淑徳学園理事長より「宗教大学（大正大学）社会事業研究室時報」寄贈。
2月 8日	第147回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者3名）。
2月12日	福田会育児院史研究会ポーランド児童関係日誌解説作業（於福田会広尾フレンズ）。〈桜井〉

- 2月13日 鳥取短期大学准教授菅田理一氏高瀬真卿関係資料閲覧のため来室。
- 2月20日 コミュニティ政策学部本多敏明准教授開学草創期の龍澤祭のプログラム閲覧のため来室。
- 2月21日 福田会育児院史研究会ポーランド児童関係日誌解読作業（於福田会広尾フレンズ）。〈桜井〉
- 2月21日 2018年度アーカイブズ特別展臨時開室。
- 2月22日 第148回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者3名）。
- 2月25日 2018年度第2回淑徳大学アーカイブズ運営委員会開催（於大乘淑徳学園本部）。〈桜井・大寫〉
- 2月26日 浄土宗大念寺日鑑の原本校正調査（於茨城県稲敷市大念寺）。〈桜井・大寫〉
- 3月8日・9日 浄土宗大念寺日鑑の原本校正調査（於茨城県稲敷市大念寺）。〈桜井・大寫〉
- 3月14日 全国大学史資料協議会東日本部会第180回幹事会・第114回研究会参加（於帝国データバンク）。〈桜井・大寫〉
- 3月15日 2018年度アーカイブズ特別展臨時開室（3月16・21・24日も臨時開室）。
- 3月16日 2018年度第3回千葉・関東地域社会福祉史研究会運営委員会出席（於墨田区西光寺）。〈桜井〉
- 3月19日 千葉県文書館より展示資料借用及び千葉寺にて展示用写真撮影。〈桜井・大寫〉
- 3月20日 淑徳大学アーカイブズ叢書8『浄土宗関東十八檀林大念寺日鑑』二刊行。
- 3月22日 第150回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者3名）。
- 3月22日 職員古宇田亮修氏より新聞記事紙面寄贈。
- 3月22日 大学事務部へ『淑徳大学50年史』掲載の写真データ提供（校章・開学式・開学式当日の学祖）。
- 3月28日 職員相沢修一郎氏より埼玉キャンパス関係の写真CD寄贈。
- 3月29日 総合福祉学部米村美奈教授より『社会学の魅力 '03』寄贈。
- 3月29日 大学事務部へ『アーカイブズ・ニュース』第17号表紙の時計塔写真データ提供。
- 4月1日 銚子市圓福寺より展示資料借用。〈桜井〉
- 4月2日 平成30年度淑徳大学アーカイブズ特別展第Ⅱ期開催。
- 4月2日 長谷川匡俊大乘淑徳学園理事長より平成30年度卒業証書授与式関係資料寄贈。
- 4月6日 長谷川良信先生ゆかりの地（舟形学園近隣）撮影のため館山市船形出張。館山市郷土資料館訪問。〈大寫〉
- 4月8日 職員古宇田亮修氏より『中外日報』寄贈。
- 4月8日 國學院大學博物館春の特別展見学及び大学図書館にて今年度の展示準備のための調査。〈大寫〉
- 4月9日 『大念寺日鑑』三の筆耕者・監修者と打ち合わせ（於上野）。〈桜井・大寫〉
- 4月11日 長谷川匡俊大乘淑徳学園理事長より本年度入学式関係及び淑徳と野幼稚園70周年記念式典関係資料寄贈。
- 4月11日 元職員菅谷厚子氏より「大学沿革史」寄贈。
- 4月12日 NPO法人ちば生浜歴史調査会白井孝氏より『椎名上郷名主文書』寄贈。
- 4月12日 総合福祉学部結城博康教授ゼミ1年生20名アーカイブズ展示見学。
- 4月12日 コミュニティ政策学部矢尾俊平教授ゼミ1年生15名アーカイブズ展示見学。
- 4月12日 第151回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者3名）。
- 4月16日 総合福祉学部白井伊津子教授と学生3名アーカイブズ展示見学。
- 4月20日・21日 2019年度日本アーカイブズ学会大会参加。〈桜井・大寫〉
- 4月23日 2019年度特別展示準備のため亀山・伊勢方面出張。〈大寫〉
- 4月23日 認証評価室より大学刊行物寄贈。
- 4月25日 全国大学史資料協議会東日本部会第181回幹事会出席（於専修大学神田キャンパス）。〈桜井・大寫〉
- 4月26日 第151回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者3名）。
- 4月26日 コミュニティ政策学部鏡論教授・岸上眞子教授と学生15名アーカイブズ展示見学。
- 4月26日 高校教員対象説明会参加者10名学祖展示見学。
- 4月26日 2019年度第1回福田会育児院史研究会出席（於福田会広尾フレンズ）。〈大寫〉
- 5月5日 大巖寺宝物殿ミニ展示コーナー準備。〈大寫〉
- 5月6日 足立区博物館企画展示見学。〈大寫〉
- 5月8日 大巖寺宝物殿客員研究員石川達也氏と『大念寺日鑑 二』の校正打ち合わせ（於中目黒）。〈桜井〉
- 5月10日 人文学部歴史学科1年生60名と教員アーカイブズ及び大巖寺見学。
- 5月10日 第152回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者4名）。
- 5月10日 2018年度特別展「夢の力—歴史・仏教から福祉へ—」第Ⅱ期終了（6月30日まで見学希望者対応）。
- 5月11日・12日 社会事業史学会第47回大会参加（於北星学園大学）。〈桜井・大寫〉
- 5月13日 北海道大学大学文書館視察。〈桜井・大寫〉

5月16日	千葉県文書館へ特別展の借用資料返却及び今年度の展示準備のため調査。〈大罵〉
5月16日	銚子市圓福寺に特別展の借用資料返却。〈桜井〉
5月17日	今年度の特別展準備のため国立歴史民俗博物館常設展見学。〈大罵〉
5月18日	アーカイブズ特別展臨時開室。
5月20日	千葉県文書館で方面委員に関する資料の取作業。〈桜井〉
5月23日	福田会育児院史研究会ポロランド児童関係日誌解読作業（於福田会広尾フレンズ）。〈桜井〉
5月24日	第152回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者4名）。
5月24日・25日	今年度特別展準備のためムカサリ絵馬関係資料調査（山形県天童市若松寺等）。〈桜井〉
5月28日	アーカイブズ特別展臨時開室。
5月30日	全国大学史資料協議会東日本部会2018年度総会出席（於東京経済大学国分寺キャンパス）。〈桜井・大罵〉

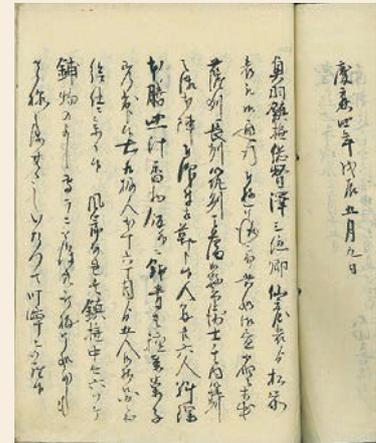
「淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会」のご案内

— 参加者を募集しています —

淑徳大学アーカイブズでは、地域の方々との交流を深めるため、「古文書に親しむ会」を開催しています。内容は、当アーカイブズが所蔵している史料をはじめとして、江戸時代から近代にいたる史料を幅広く読みながら、当時の社会や地域について学んでいこうというものです。

会は毎月第2・第4金曜日の午前10時からお昼頃まで、淑水記念館で開催しています。初心者の方も大歓迎です。くずし字が読めるようになりたい方や昔のことに興味のある方は、どなたでも参加できます。ぜひ当アーカイブズまでご連絡下さい。皆さんで楽しく史料を読んでいければと思います。

〈問い合わせ・申し込み〉 淑徳大学アーカイブズ
TEL 043 (265) 7526 〈直通〉



淑徳大学アーカイブズでは、 大学及び大乗淑徳学園に関する資料を広く収集しています。

- ① 大学及び学園が発行した新聞・雑誌・広報誌・年報・報告書等。
- ② 学生時代の写真・講義ノート・教科書・手帳・日記・記念品・記事・各種書類等。
- ③ 学生時代に使用していたもの。
- ④ 大学及び学園のサークルや研究会の活動を示すもの。

上記以外の物でも結構ですので、お気づきのものがあればお気軽にご連絡下さい。

また、大学及び学園の各部署や学部学科、機関で保存期間の満了した文書、あるいは廃棄の対象となる文書が発生した場合は、大学アーカイブズまでご一報下さい。



淑徳大学
アーカイブズ・ニュース 第19号
NEWSLETTER of
SHUKUTOKU UNIVERSITY ARCHIVES

発行日：2019年（令和元）7月10日

編集・発行：淑徳大学アーカイブズ

〒260-8701 千葉県千葉市中央区大蔵寺町200

TEL 043-265-7526（直通）

e-mail : archives@soc.shukutoku.ac.jp